

## 行基寺所蔵「往生要集図画」の施主と制作背景に関する一考察

タンティスック ナムサイ（大阪大学大学院）

臥龍山行基寺所蔵《往生要集図画》（以下、《行基寺本》と略記）は紙本著色、十四幅からなり、各幅縦一二五.六センチ、横五四.九センチの作品である。俱生神、五道大神、奪衣婆、賽河原（地藏菩薩）、十王などのモチーフが画面上部に大きく描かれ、各幅の主要モチーフとして取り上げられている。このように、《行基寺本》は「往生要集」と冠しながら、『往生要集』に説かれていない要素が描写されていることから、『往生要集』から若干外れる「往生要集絵」といえよう。

今後、《行基寺本》の「往生要集絵」の性格を考えて、他の「往生要集絵」と考察してゆくにあたって、まず《行基寺本》の図像分析と制作背景を明らかにする必要があるだろう。そこで、本発表の目的は、図像分析によって《行基寺本》と『絵入り往生要集』との関係、さらに施主と制作背景を明らかにすることである。そのため、本発表においては、《行基寺本》の描写表現を分析し、『絵入り往生要集』の挿絵と比較することと、箱書きの内容から制作年代を考える。そして、箱書きに記されている施主を明らかにし、制作背景の仮説を提起してみたい。

表現分析の結果として、《行基寺本》の雲や水の表現は、六道珍皇寺本や兵庫県立博物館本《熊野観心十界曼荼羅》、大楽寺本《地藏十王図》などの近世前期作品に近く、ただし、画面下部の悪道図は、『絵入り往生要集』寛文十一年刊本系挿絵からの影響がうかがえる。よって、《行基寺本》は十八世紀初期に制作されたと思われる、箱書きに記されている享保二年に近い時期のものである。

箱書きによると、《行基寺本》は、名古屋両替町の方誉貞成と伊藤仁兵衛に寄付されたという。『寛延旧家集』、『那古屋府城志』などの郷土史料では、伊藤仁兵衛の由緒が確認できた。つまり、伊藤欄丸の長男であり、豪商人の伊藤次郎左衛門の兄でもある。《行基寺本》は多い幅数の他、各画面に金箔切箔が施されている。そうした材料の費用をサポートすることのできる施主は普通の庶民ではなく、裕福である特徴が欠かせないだろう。以上の史料にみられる伊藤仁兵衛がその特徴を持っているので、箱書きの「伊藤仁兵衛」は本家出身者であると考えられる。

そして、『伊藤家小伝』という資料に所収されている伊藤仁兵衛家系譜図から、「伊藤仁兵衛」と名乗り、享保二年に《行基寺本》を寄進できる人物は第五代仁兵衛安信であると指摘できる。さらに、彼の母は、父の第四代信興と出家して、「方誉貞感法尼」と改名した。信興の没年正徳四年以前より、「方誉貞感」と呼ばれるようになったのだろう。以上の資料から、《行基寺本》の施主は、伊藤仁兵衛家出身の者で、第五代安信と母の方誉貞感であるということが明らかになった。

《行基寺本》は死出の山、三途の川、奪衣婆を通して、十王に罪業を裁断され、悪道の責め苦を受けるが、最後に救済されるという構成をとっている。こうした構成から、《行基寺本》は追善供養に用いられたのではないかと推定できる。そこで、施主と行基寺の事情について調べた結果、二つの制作背景の仮説の提起を試みる。一、伊藤家の記録によれば、享保二年に第四代信興と秀の回忌法要が行われた。ただし、伊藤仁兵衛家の菩提寺である西光院、あるいは西光院の末寺である法応寺に寄付された方が自然なのではないか。二、行基寺は高須藩主松平家の菩提寺である。行基寺の再興に尽力した松平義行が正徳三年に没したため、《行基寺本》の奉納年は松平義行の三回忌の年とみられる。『寛延旧家集』には藩主（大名）の法要に商人が物品を奉納した例が確認できる。以上のことから、《行基寺本》もそうした形で寄付された作品ではないかと思われる。